

☆年間第28主日(10月15日)の聖書朗読☆※主任司祭からの解説があります。

第一朗読 (イザヤの預言 25章 6-10節)

万軍の主はこの山で祝宴を開き、すべての民に良い肉と古い酒を供される。
それは脂肪に富む良い肉とえり抜きの酒。

主はこの山で、すべての民の顔を包んでいた布と、すべての国を覆っていた
布を滅ぼし、死を永久に滅ぼしてくださる。

主なる神は、すべての顔から涙をぬぐい、御自分の民の恥を地上からぬぐい
去ってくださる。

これは主が語られたことである。その日には、人は言う。見よ、この方こそ
わたしたちの神。わたしたちは待ち望んでいた。この方がわたしたちを救って
くださる。この方こそわたしたちが待ち望んでいた主。その救いを祝って喜び
躍ろう。主の御手はこの山の上にとどまる。

答唱詩編 (詩編 23章 2-3, 5-6節)

主はわれらの牧者、わたしは乏しいことがない。

神はわたしを緑の牧場に伏させ、いこいの水辺に伴われる。
神はわたしを生き返らせ、いつくしみによって正しい道に導かれる。

あなたははむかう者の前で、わたしのために会食を整え、
私の頭に油を注ぎ、わたしの杯を満たされる。

神の恵みといつくしみに、生涯伴われ、
わたしはとこしえに、神の家に生きる。

第二朗読 (使徒パウロのフィリピの教会への手紙 4章 12-14, 19-20節)

皆さん、わたしは貧しく暮らすすべも、豊かに暮らすすべも知っています。
満腹していても、空腹であっても、物が有り余っていても不足していても、

いついかなる場合にも対処する秘訣を授かっています。わたしを強めてくださる方のお陰で、わたしにはすべてが可能です。それにしても、あなたがたは、よくわたしと苦しみを共にしてくれました。

わたしの神は、御自分の栄光の富に応じて、キリスト・イエスによって、あなたがたに必要なものをすべて満たして下さいます。わたしたちの父である神に、栄光が世々限りなくありますように、アーメン。

福音朗読 (マタイによる福音書 22章 1-14節)

そのとき、イエスは祭司長や民の長老たちに、たとえを用いて語られた。「天の国は、ある王が王子のために婚宴を催したのに似ている。王は家来たちを送り、婚宴に招いておいた人々を呼ばせたが、来ようとしなかった。そこでまた、次のように言って、別の家来たちを使いに出した。『招いておいた人々にこう言いなさい。「食事の用意が整いました。牛や肥えた家畜を屠って、すっかり用意ができています。さあ、婚宴においでください。』」しかし、人々はそれを無視し、一人は畑に、一人は商売に出かけ、また、他の人々は王の家来たちを捕まえて乱暴し、殺してしまった。そこで、王は怒り、軍隊を送って、この人殺しどもを滅ぼし、その町を焼き払った。そして、家来たちに言った。『婚宴の用意はできているが、招いておいた人々は、ふさわしくなかった。だから、町の大通りに出て、見かけた者はだれでも婚宴に連れて来なさい。』そこで、家来たちは通りに出て行き、見かけた人は善人も悪人も皆集めて来たので、婚宴は客でいっぱいになった。王が客を見ようと入って来ると、婚礼の礼服を着ていない者が一人いた。王は、『友よ、どうして礼服を着ないでここに入って来たのか』と言った。この者が黙っていると、王は側近の者たちに言った。『この男の手足を縛って、外の暗闇にほうり出せ。そこで泣きわめいて歯ぎしりするだろう。』招かれる人は多いが、選ばれる人は少ない。」

朗読解説 一主任司祭より皆様へ一

急に秋が訪れたようですね。今日は寒くなりました。冷たい雨が降っています。一雨ごとに秋が深まるのでしょうか。自然の変化は神さまの手品みたいですね。木の葉一枚一枚に不思議な仕掛けが隠されているのです。その変化には風、気温、雨、太陽、虫などまたいろいろな物事のかかわりがあり、その方程式は数えることができません。しかし木の葉の一枚一枚はその中から確実に神さまの意思を選び取っているのです。それであれだけの紅葉が見事なまでに輝いているのです。私たちが紅葉を見るたびに神さまが私に与えてくれた方程式を選んで輝きましょう。今日の朗読の主題は神さまの招きの「祝宴・婚宴」です。

第一朗読 (イザヤの預言 25章 6-10節)

イザヤは主なる神の望みは山の上で祝宴を催し、すべての人を招き喜びを共にすることだと述べています。昔は食べ物一つでも大事なものでしたが、主なる神は「良い肉(脂肪に富む良い肉)と、古い酒」を皆にふるまわれるのです。今で言えば霜降りの上等の宮崎牛とか、コンクールで金賞を獲得した上等のワインとかでしょうか。そこでイザヤは言います。「その救いを祝って喜び踊ろう」と。またそれだけでなく人々が苦しみ悲しんでいる死を永久に滅ぼし、すべてのひとの顔から涙をすべてぬぐってくださるので、だから希望をもって救いを待ち望もうと呼びかけています。

答唱詩編 (詩編 23章 2-3, 5-6節)

「主はわれらの牧者、私は乏しいことがない」という答唱と、呼応する詩篇23は神への信頼を歌ったもので、葬儀の時などによく歌われ、洋画の葬儀の場面でもよく唱えられています。

第二朗読 (使徒パウロのフィリピの教会への手紙 4章 12-14, 19-20節)

フィリピの信者に対する感謝の言葉が述べられています。パウロは捕らえら

れて獄中にいますが、少しもつらさや悲しみに陥っている様子はありません。宣教活動をやり切った気持ちがあるのでしょう。今は、皆に感謝を伸べ励まし、神に感謝することが最善の生き方だと感じているようです。私たちも自分の置かれた状況に悲しむことなく、神に感謝しながら生きていきたいものですね。

福音朗読 (マタイによる福音書 22章 1-14節)

天の国についてのイエスのたとえ話です。主なる神の呼びかけにまたイエスの呼びかけに、意固地になって従えない民の長老たちの心に迫る話です。ここでも先の「祝宴・婚宴」の喜びが語られます。それでも神の招きを避けようとする人々はいろいろな理由をつけて、欠席するのです。人間の心は実にかたくなですね。自分の決めたことが一番いいのです。そこには価値の基準が自分にあるのです。律法の解釈を自分たちの都合のいいように決めて、神からの愛の誘いを見逃してしまっているのです。もったいない話です。



渋柿の枯れ葉っぱ (2021年11月)

カトリック足立教会
主任司祭 野口重光